

東日本大震災遺族における「死者との相互行為」

——岩手県大槌町を中心に——

○岩手大学 麦倉 哲

1 目的

この報告の目的は、死者との対話をもつ意味を社会的に明らかにすることである。人は、生きている他者とのみ対話しているわけではなく、亡くなった方とも対話している。身近な死を経験した被災者が、故人とどのように向き合ってきたかを、大量観察調査と、ケース調査の結果から明らかにするとともに、報告者自身がフィールドワークを通して死後の他者と向き合ってきた経験から考えたい。

2 方法

そこで、データとして、報告者がこれまで5年の間に取り組んできた各種調査結果を活用する。大槌町避難所リーダーインタビュー、大槌町仮設住宅調査、東日本大震災犠牲者遺族へのケーススタディ、吉里吉里地区死亡状況調査、吉里吉里地区避難行動調査等である。報告者が多様な生存者や悲嘆者と交流を結んできたフィールドワークによってえられた参加（関与）型調査の結果も、本報告の分析の対象である。

3 結果

大切な家族や近親者を亡くした人は、あれ以来変わってしまった日常生活を生きている。死をどのように受けとめるか、故人を亡きものとして生きていけるのか。遺族が受ける、内外の独特の社会的プレッシャーもある。心の復興は容易ではないが、死者との対話の継続が一定の大きな意味をもっていることが明らかとなった。帰ってくるかと期待する人、姿の見えない故人が以前と変わらず家にいるものとして暮している人、故人の遺志を継いだり、意向に尽くそうとする人、夢に出てきた故人から励まされる人、お墓に向かって叫ぶ人、故人の気配を実感している人、故人がみえる人、故人が犠牲となった場所（旧役場ほか）に通い続ける人、犠牲となった人びとに見守られていると実感する人など。

4 結論

東日本大震災犠牲者遺族にみる死者との対話は多様である。しかし、多かれ少なかれ、死者との対話が続いていると。そのことは、犠牲者家族や親密な知人にとって、日常生活の一部分を形成している。この対話が持っている意味や価値については、多様な寄り添い者や交流者や価値支持者が加わることにより、社会的に波及していく効果もある。私も一員であるが、グローバルな社会のもつ負の側面、すなわち物質や経済や軍事が優先され死者が容易に忘れ去られていく面から考えると、個別の死に寄り添うことこそが世界的に価値ある営みであることを学術的に発信していきたい。ご批評を乞う。

文献

麦倉哲ほか、2015「東日本大震災犠牲者の被災要因からみた『地域防災の課題』—大槌町吉里吉里地区自主防災検討のための死亡状況調査から—」『岩手大学教育学部教育実践センター紀要』第14号。
麦倉哲ほか、2016「大災害犠牲者の記録を残す活動の社会的意義に関する研究—岩手県大槌町『生きた証プロジェクト』を事例として—」『岩手大学研究年報』第70巻。
麦倉哲ほか、2016「東日本大震災被災状況からみた社会の脆弱性とその克服課題—リスク層への支援と脆弱性の克服」『岩手大学教育学部附属実践総合センター研究紀要』第15号